南葵音楽文庫ミニレクチャー　Vol. 13

徳川頼貞と大田黒元雄～青春の音楽～

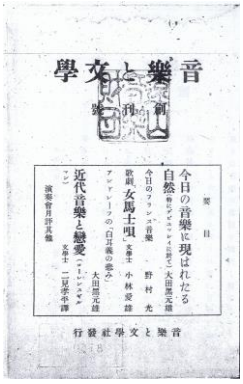
林淑姫

2018 年 3 月 10 日（土）11：00
南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

大田黒元雄
（1918 年　25 歳）

『バッハよりシェーンベルヒ』
（山野楽器店　1915 年）



『音楽と文学』創刊号
（1916 年 3 月）

「スクリアビンとデビュッシイの夕」
（1916 年 12 月 9 日　基督教青年会館）

徳川頼貞（1892-1954）と音楽評論家大田黒元雄（1893-1979）は 1910 年代はじめ、ともに英国に留学、第一次世界大戦前夜のヨーロッパ音楽を体験した。滞在期間は大田黒が 1912（大正元）年 12 月から 14 年 6 月、頼貞が 1913（大正 2）年 9 月から 15 年 9 月である。重なる期間はほぼ半年、ロンドンで同じ演奏会を聴いてもいるが、親しく交わったという記録は見出せない。

帰国後の 1916（大正 5）年 8 月 22 日、大田黒元雄は芝三光町の徳川頼貞邸を訪れた。大田黒は前年に著書『バッハよりシェーンベルヒ』を上梓、新進気鋭の音楽評論家として、また同時代のヨーロッパ音楽を紹介する異色のピアノ奏者としても知られていた。頼貞は父頼倫の南葵文庫内に設けられた音楽資料室（のち音楽部）の運営にあたるとともに、音楽堂の建設計画を練っていた。夏の日の夕方、二人はシャリャーピンが歌う「ボリス・ゴドノフ」や「イーゴリ公」序曲のレコードを聴いて過ごし、話し込んで遅くなったので、夕食をともにした。頼貞は英国留学への途次ペテルブルグではじめて観たオペラ「カルメン」の話などをし、大田黒は辞するときグラナドスの楽譜を借りた（大田黒元雄『第二音楽日記抄』）。20 代前半の音楽青年の語らい。楽しそうだ。頼貞も翌年のクリスマス・イヴに大田黒邸で催された音楽会に出かけた様子である。二人は海外音楽の事情通としてジャーナリズムにも頼りにされた。1918（大正 7）年に来日したロシアの作曲家プロコフィエフとは特に親しい交友関係を結んでいる。

大田黒元雄は南葵楽堂の演奏会にもよく顔をだしたようだ。1919（大正 8）年 5 月、横浜在留の外国人によるアマチュア・オーケストラの演奏会を聴きに出かけた彼は、「南葵楽堂は気持ちのいいホールだ。あのホールで開かれる演奏会へ行くのは近頃での愉快な事の一つだ。」と書いているが（同上）、翌年 11 月のパイプオルガン披露演奏会の際には、ネイラー「序曲」の演奏に対してもオルガンについても厳しい評を残している（『第三音楽日記抄』）。

帰国後の二人が選んだ途は、一方は音楽ホールと音楽図書館の創設、他方は音楽批評、と異なってはいるが、それぞれの仕事の出発点となり、その後も変わらず彼らの活動を支え続けたものは、当時のヨーロッパ文化と音楽の体験にある。同じ時代と環境にあって共振する二人の交流は静かに進められていたようにみえる。